



技を磨き、色を重ね、絵に命を吹き込む。

江戸木版画 摺師

小川 信人氏

江戸時代に誕生した浮世絵。美人画の

喜多川歌麿や役者絵の東洲斎写楽、風景画の葛飾北斎、歌川広重といった絵師たちの作品は、彫師が版木に絵を起こし、摺師がそれに色を付けて和紙に複写するという木版画摺の技術が発展したことで、庶民の娯楽となり、世間に広まった。

東京の下町、荒川区の工房で、伝統の技



Nobuto Ogawa

1990年東京都生まれ。荒川区指定無形文化財保持者である故・関岡功夫氏を母方の祖父に持つ。現在は祖父の弟子であった川嶋秀勝氏の下で、より高度な技術を身に付けようと努力を続けている。

江戸木版画 (えどもくはんが)

浮世絵を多くの人々に伝えようと、彫師と摺師が技術を向上させ江戸時代に発展。明治時代以降、印刷や写真の台頭により衰退した時期もあったが現在まで受け継がれ、2007年には国の伝統的工芸品に指定。



葛飾北斎 神奈川沖浪裏

を継承すべく日々研鑽を積む小川信人さんは、摺師であった祖父の木版画摺を見て育ち、職人への憧れを強く抱いた。

きっかけは？

小川「個人の力で勝負できる職人はかっこいい」と思い、摺師になる決意をしました」

木版画摺は、数枚の版木を用いて色を重ねることで、豊かな彩りを生む。版木には「見当」という印があり、それに合わせて和紙を置くことでズレのない重ね摺りが可能となる。

例えば、葛飾北斎「富嶽三十六景」の一図「神奈川沖浪裏」。この絵の象徴ともいえる波を表すときは、濃い藍で輪郭線をしつかりと描き、次に中藍で濃い藍とのコントラストを付け、最後に波頭に淡い藍を摺り込むことで、波のうねりを浮かび上がらせる。

木版画は、触れて愛でることもできる。土と顔料からなる絵具に糊と膠を加えることで、色に厚みが生じるからだ。また、摺られた絵具は和紙の繊維一本一本に浸透し、色落ちしない。数百年も前の浮世絵が良好な状態で残っているのは、日本古来の技の賜物だ。

今後の抱負は？

小川「お客さんの注文通りに、上手に摺る職人になることです。さらには、同世代の違う業種の職人さんたちと協力して、伝統工芸全体を盛り上げていきたいと思います」

確固たる信念を抱き、職人という生き方を選んだ若き摺師。伝統の技を継承し、木版画摺を後世に伝えていくことを目指す。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2018年6月取材。掲載内容は取材当時のものです。

映像ドキュメンタリー
「明日への扉」を
ぜひご覧ください。

WebやTVなどで
お楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットでもご覧になれます。
今回ご紹介した方を含め、他にも多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉

検索

SNS配信

Facebook <https://www.facebook.com/AthomeTobira>
Twitter <https://twitter.com/AthomeTobira>

TV番組

ディスカバリーチャンネル (CS)
冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中



Discovery CHANNEL

最新号のご案内

好評公開中

No.108

象眼師
伊藤 恵美子 氏
(熊本県)